



郡
具



高・大・一般 漢字(楷書B)

※楷書A、Bは段級をとわず両方出品も可。

長野 竹軒

せんまきちよくひよう
薦季直表 (鍾繇) ④

〈解説〉

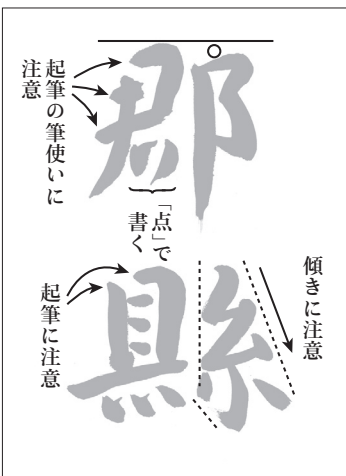
楷書の臨書学習における一般的な目的は、「布置(半紙の収め方)、字形、用筆、線質、使用する用具の選定」などが挙げられます。「楷書A」では、このうち「布置、字形、用筆」などが学習の中心になると思いますが、「楷書B」ではさらに「線質や使用する用具の選定」が加わります。皆さんはこの「楷書B」の目的を理解して学習するように心掛けましょう。今月の課題も学習目的は線質です。力強く起筆するのではなく、どの画も軽く始筆するように臨書しましょう。

〈学習上の留意点〉

学童向けの表面がツルツルした半紙を使用する場合は、その裏に書きましょう。もしくは濃墨に合う、手漉きに近い半紙を推奨します。

「郡」：起筆の筆使いと左右の組み立て方に留意する。

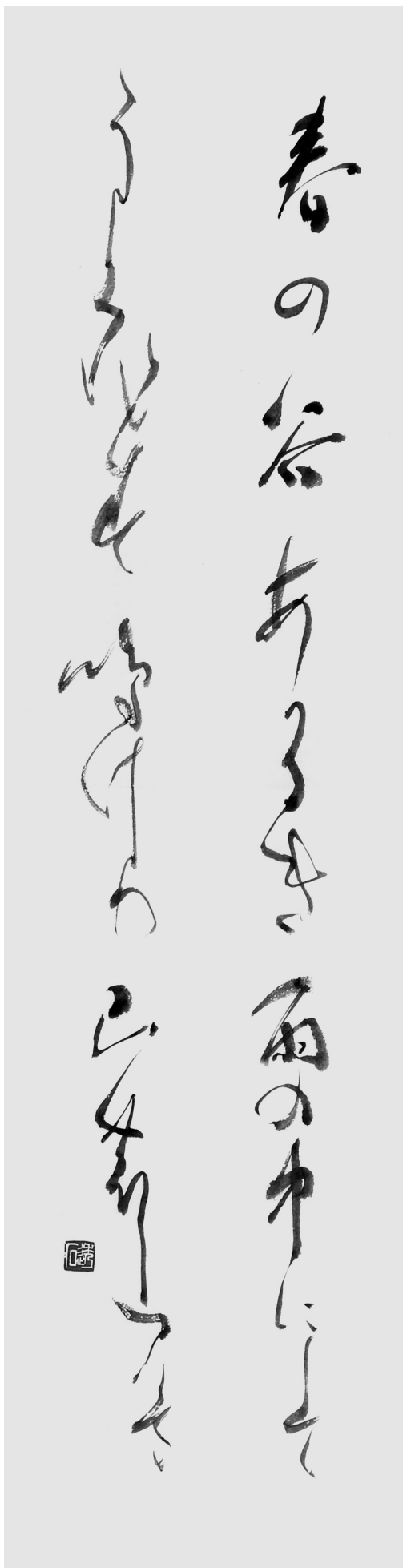
「具」：柔らかく丁寧な運筆で書く。



高・大・一般 仮名

新(10級から五段までは作品用紙として画仙紙八ッ切り(68cm×17.5cm)又は、画仙紙半切(136cm×35cm)の出品。
六段から八段までは作品用紙として従来通り画仙紙半切(136cm×35cm)のみの出品です。

清水 透石

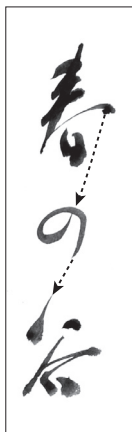


半切に和歌を書く

〈釈文〉春の谷 あ可る^かき雨の中にして うぐ^ひ非春^す鳴け利^り 山農^のしづ介^ささ
 〈出典〉尾上柴舟 日記の端より 明治文学全集63 P 164

歌意 春の谷に明るい春雨^{はるさめ}が静かに降っている中で鶯が鳴いている。何とこの山の静けさであろうか。▽伊豆で詠^よんだ歌。

揮毫上の注意 身近な近代短歌を選んだ。全体的に注意することは、「漢字とかなの調和」である。漢字は行・草書体で、かなよりやや大きく



く書くと安定する。「春の谷」

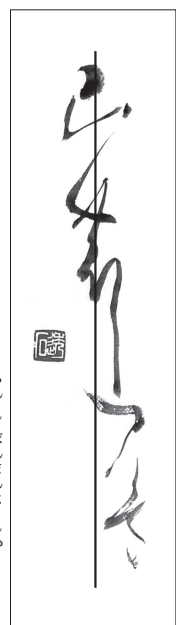
は横画を太く書きやや右上りに。この文節は休まず一気に運筆する。放ち書きだが筆意は連綿の気分。「あ可るき」は、一行の中央部分、力強く、筆を休めず伸びやかに運筆する。文字

の懐を広くみせるように構成すると安定する。行末の「雨の中にして」は、次行と共に雅印の位置を考慮して次第に行の中心を右に移してゆく。字形を左右に傾けて、行間の余白を美しく見せる工夫をする。



二行目行頭「うぐ非春」の四字連綿はこの作品の最も実力を示すべき部分で運筆技術の充実度を判断できる所である。繰り返し練習して、軽快に走筆する。「鳴け利」は、縦線を強調している。右への広がりも意識しつつ運筆する。

結句「山農しづ介さ」は、縦横線を直線的に鋭い線で構成している。また、雅印を押す位置を予想して中心を次第に右へ移している。



この作品では、漢字は「藍紙本万葉集」から、かなは「元永本古今集」をベースに集字して構成している。学書では、日頃学んだ基礎基本を自己の作品にどう展開するかが大切である。